

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 12 日現在

機関番号：13103

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23531172

研究課題名(和文) 低学年児童を対象とした小集団における文字学習支援方法の開発

研究課題名(英文) Development of Learning Support Methods of Letters using Small Groups in the Lower Grades of Elementary School

研究代表者

大庭 重治(OHBA, SHIGEJI)

上越教育大学・学校教育研究科(研究院)・教授

研究者番号：10194276

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円、(間接経費) 1,020,000円

研究成果の概要(和文)：読み書きの学習に困難を示す児童に対する小集団学習場面を活用した文字学習支援方法の検討を目的として、読み書きの学習につまずく子どもの発達特性と支援方法に関する最近の研究成果の把握、有効な支援方法に関する臨床的検討、大学院生のための支援方法学習プログラムの検討を実施した。その結果から、学習支援については、人間社会という枠組みの中での子どもの把握、小集団学習場面の計画的活用、小集団における明確な支援者の役割分担、個別的支援の併用等の必要性を指摘し、大学院生の学習プログラムについては、学習段階に応じた自己研鑽機会の提供等の必要性を指摘した。

研究成果の概要(英文)：For the purpose of the development of learning support methods of letters using small groups in lower grades of elementary school, the review of the studies on the development of learning letters and the support methods, the clinical consideration about the effective support methods, examination of the learning program of the support method for graduate students were performed. From the results, when we carry out learning support for children, understanding of children in a human society framework, systematic practical use of a small learning group and clear supporter's division of roles were considered to be required. About the graduate student's learning program, the necessity of self-study opportunity according to specialty level was pointed out.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：文字 学習 支援方法 児童

1. 研究開始当初の背景

読み書きに関する従来の研究においては、その基礎となる認知機能や運筆機能の検討がなされていた。また、コミュニケーション手段として文字を使用する観点からは、聞き手や読み手の存在の重要性が指摘されていた。これらの研究成果は、読み書きの学習につまずく子どもの支援における重要な手掛りとして利用されてきた。研究代表者も個別の支援場面において、主として文字学習状況の評価のあり方について検討してきた。しかしながら、子どもたちのより主体的な学習を促すためには、日常生活の中で文字の役割を実感できるような学習形態が必要不可欠であり、評価方法の検討とともに、小集団学習場面を活用した支援方法の検討が改めて必要であった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、小集団学習場面を活用した文字学習支援方法を、実践的な観点から明らかにすることであった。具体的には、まず低学年の子どもを対象とした文字学習に関する文献をレビューし、読み書きの学習につまずく子どもの発達特性と支援方法に関する最近の研究成果を整理した。その結果に基づき、小集団の中で子どもの学習状況を把握した上で支援に結びつけるための方法を試作し、その有効性と問題点を継続的な臨床指導を通して検証した。また、一連の研究過程を通して、大学院生にこのような小集団を活用した学習支援方法を習得させるための手立てについても補足的に検討した。

3. 研究の方法

(1) 研究動向の把握

児童生徒を対象とした文字学習に関する文献に基づき、学習につまずきを示す子どもに対する支援手だてに関する研究成果を整理した。特に、読み書きにつまずきを示す子どもの学習支援における諸課題、そのような子どもの支援における小集団学習場面設定の意義、小集団学習場面の設定により期待される学習効果とその活用方法について検討した。

(2) 学習支援に関する臨床的検討

臨床的検討は、市内小学校及び上越教育大学特別支援教育実践研究センターにおいて実施した。

市内小学校における臨床的検討では、毎週水曜日の放課後に「放課後学習会」を開催し、小集団による文字学習支援を継続的に実施した。放課後学習会には、説明会の後、参加する意思を示した児童が参加した。学習会の開始時には、児童の保護者に対し個人情報厳重に保護され

ることを伝え、合わせて学習会の目的、ビデオ記録及び諸検査の実施、研究成果の公表について、文書により承諾を得た。学習会には全体で30名前後の児童が参加した。

特別支援教育実践研究センター（以下、センター）における臨床的検討では、小集団の中での初期の漢字書字支援に関する基礎的資料を得るために、漢字学習に特異的に困難を示した一事例を対象として、市販のソフトウェアとタブレット端末を用いた学習教材の開発を行い、その活用と効果について検討した。研究の開始に先立ち、対象者の保護者に対し個人情報厳重に保護されることを伝えるとともに、研究目的、研究活動におけるビデオ記録及び諸検査の実施、研究成果の公表に関して、資料に基づいて説明を行い、文書により承諾を得た。

(3) 大学院生のための学習プログラムの検討

市内小学校における臨床的検討に参加した院生を対象として、7月と2月の末に、次の項目について、5件法により回答を得た。項目は、1)教材の準備や実施計画の策定など、臨床の準備は十分であった（準備状況）、2)臨床場面における課題の提示方法など、実施方法は適切であった（実施方法）、3)カンファレンスでは、ディスカッションに積極的に参加した（カンファレンス）、4)文献を調べるなど、臨床内容を深めるための努力をした（関連努力）、5)全体として、臨床における自らの学習効果は十分得られた（全体）、の5項目とした。また、自らが設定した臨床の目標とその達成度、自らの参加状況に関する今後の課題についても自由記述により回答を得た。これらの結果に基づいて、大学院生に小集団を活用した学習支援方法を習得させるためのプログラムのあり方について試行的に検討した。

4. 研究成果

(1) 「研究動向の把握」に関する成果

特別な教育的ニーズのある子どもたちの学習支援を実施していく際には、子どもたちの学習は人間社会という枠組みの中でこそ成立するものであることを改めて確認しておく必要がある。大庭（2005）は、ヴィゴツキー（1956）の考え方を参考にして、学習支援の対象となる子どもを「わたし」ととらえ、この「わたし」と「他者」や「事物」との相互関係から人間社会における学習支援の基本構造を記述している。「わたし」は、先生、友達、家族など、人間社会の中の「わたし」を取り巻く「他者」とかかわりを持つことによるのみ学習を進めていくことができる。小集団による学習場面を設定することの意義は、このような人間社会の枠組みの中

で、特別なニーズのある子どもの学習を支援していくための「他者」と「事物」を意図的、計画的に組織できる点にある。小集団学習場面のような他者と密接にかかわりながら学習を行う場面においては、他者が行っている学習の様子をじっくりと観察し、その方法を模倣する機会を得ることができる。小集団学習場面の設定により、まずそこで展開される協同活動の中で行為プランの修正が促され、それに伴って学習そのものの改善が期待される。そして、そのことは子どものメタ認知の向上にもつながり、さらには学習に対する動機づけを高める効果も生み出していく可能性がある。そのような状況を創出するためには、特に次のふたつの観点が重要であると考えられた。

第一は、支援対象である。特別な教育的ニーズが明確に示されている子どもたちだけを対象とするのではなく、学習が困難であるにもかかわらず必要とされる支援が十分に得られていない子どもや、さらには定型発達児も含めた集団が必要である。このような多様な子どもたちを含む集団を形成することにより、常に他者が近くに存在する状況を生み出すことができ、特別な教育的ニーズのある子どものみならず、通常の学級の中では学習に対する動機づけがなされにくい子どもたちにも支援の場を提供することができると考えられる。第二は、支援方針である。他者との協同活動を通して学習への意欲を高める、いわゆる内発的動機づけの考え方に基づいた支援が必要である。川村（2003）は学習障害児の支援における内発的動機づけの重要性を指摘し、学習は他者とかがわりながら活動しているという「交流感」を基礎にして進行し、その過程において自らの力を認める「有能感」や自発的に学習をしているという「自己決定感」が形成されてくると述べている。

従来の小集団学習支援においては、交流感の形成を主目標として、主支援者（Main Teacher：MT）とともに、副支援者（Sub Teacher：ST）が支援場面に配置されてきた。MTは小集団学習場面全体の進行に重要な役割を持ち、集団全体に対して課題を提示したり、STと児童、及び児童相互のかかわりの状況を監視し、随時必要な支援を補助的に実施したりする。一方、STはMTの共同支援者であるが、MTとは異なり、小集団内にいて常に子どもたちと活動を共にすることによって、MTには読み取ることができない子どもの活動状況をMTに伝達して共有する役割を果たす。

以上のことから、読み書きにつまずきを示す子どもの支援においては、人間社会という枠組みの中で子どもをとらえること、その実現方法のひとつとして、小集団学習場面を計画的に設

定すること、また小集団における支援者の役割を明確に分担することが重要であると考えられた。

(2)「学習支援に関する臨床的検討」に関する成果

放課後学習会における臨床的検討の成果

（その1）

特別な教育的ニーズのある児童を含む小集団の子どもたちに対して書くことを中心とした学習課題を提示し、特にその学習過程においてメタ認知の獲得につながる学習手掛りの提示方法と支援者のかかわり方について検討した。

対象児童は、1年生から4年生の計12名であり、2グループに分けて小集団を形成した。支援者としてMT1名、ST2名が参加した。課題は主に文章作成課題であり、文章作成の参考にできる「書き方のコツ」を提示したり、作文のプランを立てる際に使用できる「お話しメモ」を補助教材として準備したりした。

このような活動時に自発的に利用できる手がかりが提示されたり、解決方略の参考となる他者の行動を身近に観察できる状況が設定されていたりすることにより、子どもは意欲的に課題に取り組むことができるようになった。そして、そのことに伴って結果的に課題が達成されたことにより得られた有能感、自らの成功を導いた解決方略に注目するメタ認知の獲得を促すことにつながっていったと考えられた。

放課後学習会における臨床的検討の成果

（その2）

特別な教育的ニーズのある児童を含む小集団を形成し、課題解決方略の内面化に影響するといえる他者の方略に触れ、特に自己省察ができるような課題場面設定の方法や支援者のかかわり方について検討した。

対象児童は、1年生から5年生の計14名であり、4名から7名のグループに分けて小集団を形成した。支援者としてMT1名、ST2名が参加した。課題は、単語からイメージされる事柄をもとに答えを探す連想クイズ、複数の経路が考えられる迷路、絵の内容を説明する作文を取り上げ、課題を遂行する過程において、互いに他者の意見に触れ、自己省察できる場面を設定した。

その結果から、子どもの自己省察の機会を増やし、課題解決方略の内面化を促すためには、まず提示する課題の特性として、その解決過程において複数の選択肢が存在し、その選択肢を子ども同士が互いに共有できるような状況が設定されることが必要であると考えられた。また、個々の子どもがグループの他の子どもの考え方

に積極的に注意をむけるようにするために、支援者がグループの活動の流れを制御することも必要であると考えられた。

センターにおける臨床的検討の成果

市販のソフトウェアとタブレット端末を用いて教育現場への応用を想定した学習教材の開発を行い、その活用を中心とした自己学習支援システムの構築を試みた。

対象者は知的発達遅れの遅れは認められなかったが、「書く」領域でのつまづきが顕著であり、特に書字すべき漢字の想起のための学習支援が必要であると考えられた。そこで、支援者との対話の中で対象者自身が漢字の意味や字形を捉え直すことができ、さらにそのやりとりの結果を参照しながら、後日漢字の書字学習を行うことができる教材を開発することにした。ハードウェアとして iPad、ソフトウェアとして FileMaker Go を選定し、教材の開発には FileMaker Pro 12 を使用した。

その結果、教材使用期間である約 6 か月の間に、問題数として 53 問、文字数として 93 文字の漢字問題を作成した。また、教材使用期間中に、延べ 491 回の自主的な解答活動が記録され、家庭において自己学習をした日の割合は 49.7% であった。1 日の学習時間が短く問題数もそれほど多くはないものの、対象者が漢字問題解答活動に継続して取り組むことができたことは、本研究において設定した教材が対象者に大きな負担をかけることなく実施できる方法であったことを示していると考えられた。文字学習に顕著な困難を示す子どもの場合には、小集団学習場面における他者との関わりを通じた支援とともに、このような個別的な支援を並行して実施するための包括的な支援システムが必要である。

(3) 「大学院生のための学習プログラムの検討」に関する成果

1 年目の院生の場合、準備状況、実施方法、関連努力の項目において平均値に有意な上昇が認められた。一方、2 年目の院生の場合には、いずれの項目においても、7 月と 2 月の結果に有意な差は認められなかった。すなわち、1 年目の参加状況に関する自己評価は、臨床の経験に伴い上昇する傾向がみられたが、2 年目になるとその効果はみられなかった。しかしながら、2 年目には多くの院生が学習支援における MT となり、実際の支援場面では中心的な役割を果たしていたことから、大学院生を対象とした学習支援方法を習得させるためのプログラムでは、ある程度専門性を身につけた院生でも自己研鑽できる機会を十分に提供していく工夫が必要であった。そのためには、カンファレンスの質的

向上とともに、支援成果の共有を図り、カンファレンス以外の場面においても議論できる環境を提供するなどの改善が必要であると考えられた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 5 件)

樋熊 一夫・大庭 重治・石田 脩介・八島 猛
漢字の書字学習が困難な生徒を対象とした ICT 活用による学習支援システムの構築・上越教育大学特別支援教育実践研究センター紀要, 査読有, 19, 33-37, 2014.

大庭 重治・葉石 光一・八島 猛・山本 詩織・菅野 泉・長谷川 桂
小集団を活用した特別な教育的ニーズのある子どもの学習支援・上越教育大学特別支援教育実践研究センター紀要, 査読有, 18, 29-34, 2012.

〔学会発表〕(計 5 件)

大庭 重治
小学生の漢字書字における誤字傾向・日本心理学会, 2013 年 9 月 20 日, 北海道医療大学

大庭 重治
上越教育大学における特別な教育的ニーズのある子どもの学習支援 小学校における放課後学習会の活用を通して・日本特殊教育学会, 2013 年 9 月 1 日, 明星大学

大庭 重治
学習支援における小集団学習場面の活用・日本特殊教育学会, 2012 年 9 月 30 日, つくば国際会議場

Shigeji OBA, Koichi HAISHI
Retrieving Kanji Character from Memory in a Child with Learning Difficulty, American Psychological Association, 2012 年 8 月 2 日, Orlando, USA

〔その他〕

ホームページ

<http://www.juen.ac.jp/lab/sohba/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大庭 重治 (OHBA, Shigeji)
上越教育大学・大学院学校教育研究科・教授
研究者番号: 10194276

(2) 研究分担者

葉石 光一 (HAISHI, Koichi)
埼玉大学・教育学部・教授
研究者番号: 50298402

(3) 研究協力者

八島 猛 (YASHIMA, Takeshi)
上越教育大学・大学院学校教育研究科・
講師
研究者番号：00590358

惠羅 修吉 (ERA, Shukichi)
香川大学・教育学部
教授
研究者番号：70251866

石田 脩介 (ISHIDA, Yusuke)
上越教育大学・大学院学校教育研究科・
院生

菅野 泉 (KANNO, Izumi)
上越教育大学・大学院学校教育研究科・
元院生

田上 智明 (TAGAMI, Tomoaki)
上越教育大学・大学院学校教育研究科・
元院生

長谷川 桂 (HASEGAWA, Katsura)
上越教育大学・大学院学校教育研究科・
元院生

樋熊 一夫 (HIGUMA, Kazuo)
上越教育大学・大学院学校教育研究科・
元院生

山本 詩織 (YAMAMOTO, Shiori)
上越教育大学・大学院学校教育研究科・
元院生